

岡崎市美博ニュース
【アルカディア】

Alcudia

O K A Z A K I
C I T Y M U S E U M S | VOL.38
N E W S



〈如意輪観音坐像〉 江戸時代

エッセイ

『源氏物語』千年紀
— 驚嘆と礼讃

石山寺の美 — 観音・紫式部・源氏物語

歴史への誘い — 武士・信仰・民衆 —
未公開資料が語る郷土岡崎

「文化財 — 守り、伝える」催事報告

OKAZAKI
MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館

『源氏物語』千年紀 — 驚嘆と礼讃

館長 芳賀 徹

今年2008年は『源氏物語』が書かれてから一千年、というところで、すでに春から京都を中心にさまざまな行事がつついている。作者自身の記録『紫式部日記』の寛弘5年(1008年)11月1日の条に、若紫の所在をたずねる藤原公任きんとうのたわむれの話が出てくるので、少なくともそのころには『源氏物語』のかなりの部分を書き上げられ、当時の一条帝の宮廷内ですでに評判になっていたことがわかるのだ。その時点から数えてちょうど一千年ということになる。

それにしても、西暦1008年という遠い昔に、皇后に仕える35歳前後の一人の女房によって、あの長大で深遠な愛のよろこびと悲しみの物語が、すべて平仮名の大和ことばで書き綴られていたとは、なんと振り返ってみても驚嘆に値する。11世紀の初めといえば、ヨーロッパではまだそれぞれの国語で書かれた文学というものが発生さえしていなかったし、奈良朝以来日本人が文物の大半を学んできた中国大陸でも、才子佳人の奇遇の物語ぐらいいはあっても、『源氏』のような不倫姦通純愛まで幾層にも重なりもつれあいながら展開する恋愛の大河小説などというものは、まだまだ望むべくもなかった。

平安朝半ばの日本でだけ、どうしてこのような作品が成立しえたのか。自問し、人に問うてみても、なかなかこの不思議は解けない。やはり紫式部という女性の教養の深さと、驚くべき人間性洞察の力と、想像力また感受性のゆたかさや鋭さによる、という以外にないのかもしれない。それに、この女性の天才を見つけて女房に取り立て、その作を面白がり称揚し励ましさえした宮廷内の文化密度の異常なほどの高さ、というものもあったろう。そしてこれらすべての背景として、日本列島は、古事記の神話や万葉集の昔以来、上下の身分を

問わず男女の愛をおおらかに讃え歌いあげてきた、いわば「恋愛の王国」だった、というのが私の推論である。

このたびの本館の『石山寺の美—観音・紫式部・源氏物語』展をもふくめて、今春以来の一連の「千年紀展」を見てきて、『源氏物語』についてもう一つあらためて驚嘆するのは、後世におよぼしたその影響力の限りもない大きさである。

国宝の『源氏物語絵巻』は別格として、それ以後も「源氏絵」と呼ばれるジャンルが綿々つつづくことは知っていたつもりだが、それが室町期から江戸をへて明治、大正、昭和にいたるまで、これほどにも数多いとは思っていなかった。紫式部が石山寺に参籠して、一室から琵琶湖に映る名月を眺めて物語を発想したという伝

説を描く「紫式部観月図」だけでも、数十点はあった(そのなかでは、岡崎で展示された大正期京都の閨秀画家伊藤小坡の作が、若々しい面だちの式部が名月に向かってふと顔を上げ、いかにも物語の発端に思いをめぐらせているという風情で、まことに好ましかった。)

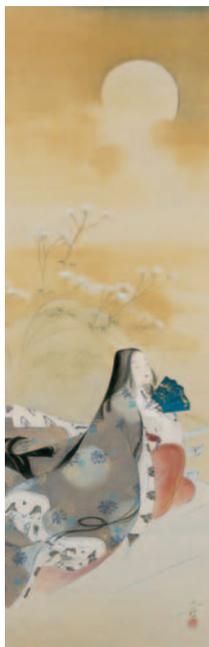
そして『源氏物語』全54帖の全文、あるいはダイジェスト版を筆写して、それに白描や彩色の絵をそえた画卷や画帖となれば、これも数えきれない。京都文化博物館では、たとえば各帖をそれぞれに縦8cmほどの小さな巻物に写したのものや、紺地金泥の表紙の小冊子に仕立てて、それらをすべて源氏ゆかりの蒔絵の小筆筒に収めたものなどもあって、その数寄を尽くした偏愛ぶりに驚いた。

『物語』のなかの名場面を選んで極彩色の屏風絵にしたもの、あるいはそれらを扇面に描いて貼り交ぜにした屏風などは、土佐派、住吉派さらに狩野派の絵師たちが腕を揮い妍を競いあって、互いに見きわめもつかないほどだ。「夕顔」の白い花の前での歌の交換、「紅葉賀」で光源氏と頭中将が青海波を舞う庭の景、「須磨」で源氏が海上の名月を仰いで京を偲ぶ風情、あるいは「若菜上」で柏木や夕霧ら貴公子たちが夕映えの桜のほとりで蹴球に興じるとき、御殿の廂の間から猫が二匹飛び出して、その紐で捲きあげられた御簾のかけに立つ女三宮を柏木が見そめてしまう情景等々、繰り返し繰り返し描かれて、これらの挿話が江戸期の武家やブルジョアたちの基本の教養となっていたことがよくわかる。

柳亭種彦の『偽紫田舎源氏』は『源氏』の庶民版で、これの草紙本や浮世絵版の普及もまたすさまじかった。その上に、『源氏』をモチーフにした蒔絵の筆筒、文台、香箱、硯箱などの精巧な工芸品も数知れず、さらに『源氏』貝合わせはもちろんのこと、そのカルタや双六までもあった。

すでに平安末の歌人藤原俊成は「源氏を読まざる者は歌人にあらず」と述べたそうだが、こうして京都、横浜、岡崎の展覧会を見てくると、「源氏を知らざる者は日本人にあらず」とさえ言えそう。一千年の歴史を通じて、『源氏物語』は平安、鎌倉の天皇家や公卿たちから、室町、安土桃山の武将たちに伝授され、江戸期に入ってさらに上下の市民層にまで普及し、さまざまなかたちで愛読されるようになったことが、一連の展示によってよく納得されたのである。

平成のいまの私たちも、瀬戸内寂聴さんや田辺聖子さんの現代語版、あるいは大和和紀さんの漫画版『あさきゆめみし』によってでもよいから、『源氏物語』の世界に入ってゆこう。そしてできれば原作にまでさかのぼって、あのしなやかに美しい大和ことばの大河のなかに、「もののあはれ」という日本人のもっとも高尚で深遠な思想と感情を学びなおそう。この学習によってこそ、私たちは21世紀世界にとってもっとも意味深い普遍的価値観を身につけた日本人として世界にのぞむことができるはずである。



《紫式部観月図》
伊藤小坡

「文化財 一守り、伝える」催事報告

学芸員 堀江 登志実

テーマ展「文化財 一守り、伝える」開催期間中（7月19日～9月28日）には、岡崎の文化財の周知、さらにはその修理・保存について意識を高めるためにワークショップ・講演会・見学会などを開催しました。ここではこれらの催事結果を報告します。

7月27日(日) ワークショップ「石を割る・削るー石工に挑戦」

講師：伝統工芸士・一級石工技能士 上野房男氏 二級石工技能士 上野梓氏

小学校5,6年生31人が石で一輪指しの花瓶を造ることに挑戦しました。本事業はあいち子ども芸術大学講座のひとつでもあり県との共催事業でした。石を割ったりする経験が初めての子ばかりで、「石をけずるのが楽しかった」「ふつうではできないたいけんができた」などの感想の声が多くありました（アンケート結果）。岡崎は御影石の産地で石工業が伝統産業になっています。石造物の文化財も多くあります。この体験は子どもたちの岡崎の石工業への理解にもなったかと思えます。参加人数31名。



8月10日(日) 講演会「仏像の修理について」

講師：愛知県立芸術大学名誉教授 山崎隆之氏

仏像の修理を行う場合、まず調査により修理の基本方針を立てることが重要です。講演会では修理の過程をスライドにより説明いただきました。聴講者には寺院関係者もあり、仏像修復についての切実な質問も出され、修復が大きな課題であることが実感されました。聴講者31名。なお、展覧会では、市内蓬生町円跡寺の市指定阿弥陀如来坐像について、山崎先生の指導のもと仏像修理師横川氏により修理方針が立てられました。一刻も早い修理が望めます。



8月31日(日) 講演会「表装のしくみ」

講師：岡崎文経堂 渡辺行之助氏

講師の渡辺氏は市内にある指定文化財の修理を手がけている表具師で、多摩美術大学の講師も勤めておられます。文化財としての表装修理を行う場合の留意点について映像を交えながら説明がありました。表具の行程である肌裏・増裏・総裏のそれぞれに使う糊の種類とその作り方など長年にわたる渡辺氏の経験に裏打ちされた講演内容でした。表装のしくみを理解することは文化財修理の方針をたてる上でも必要ですし、軸物を取り扱う上でも必要となってくるでしょう。聴講者70名。



8月24日(日) 伊賀八幡宮檜皮葺き替え現地見学会

今回の檜皮葺き替え保存処理を進めている財団法人文化財建造物保存技術協会の若林邦民氏、田中社寺の吉島氏の解説案内により、檜皮葺きの完了した伊勢八幡宮社殿の屋根を見学しました。拝殿・幣殿・本殿の工事足場に上り、屋根の檜皮葺きをまじかに見ることができました。若林さんから檜皮葺きは40年ごとに行わなければならない、その建物を伝えるのみならず、葺き替え技術をも伝えることも大事なことであると説明がありました。参加人数は33名。



9月14日(日) 当麻曼荼羅絵解き実演

講師：崇福寺貫主 稲吉満了氏

当麻曼荼羅に描かれた浄土の世界が市内中島町崇福寺貫主の稲吉氏によりわかりやすく説明がされました。当麻曼荼羅は左辺に下から上へ向かって、阿闍世王の父王幽閉から母韋提希夫人の阿弥陀仏への帰依に至る説話を描き、右辺には日想観をはじめとする十六想観のうち十三観、下辺には、残り三観を九図に分けて、上品上生から下品下生までの九品往生の相をあらわします。崇福寺に伝わる当麻曼荼羅の写真のほか、新たに制作された当麻曼荼羅により、わかりやすく説明がなされました。聴講者70名。



会期 平成20年10月11日(土)～11月16日(日)

石山寺の美 — 観音・紫式部・源氏物語

学芸員
杉山
明美



石山寺

滋賀県大津市の南部、瀬田川の左岸伽藍山の麓にあるこの石山寺には、観音のご利益をもとめ参詣する人や『源氏物語』の世界にひたる人たちが一年を通して訪れます。特に今年は「源氏物語千年紀IN大津」が石山寺を中心に開催されており、寺内でも「源氏夢回廊」と銘打ち、様々なイベントが行なわれ、連日賑わいをみせています。

このたび岡崎市美術館では、石山寺が所蔵する美術工芸品を一堂に集めて展覧会を開催する機会に恵まれました。奈良時代の創建以来、石山寺に伝えられてきた仏像・仏画・典籍・縁起絵巻を展示するほか、今年は『源氏物語』の登場から一千年という記念すべき年であることから、紫式部ゆかりの寺としても有名な同寺が、これまで収集してきた『源氏物語』を主題とした絵画・工芸品も合わせて紹介するという極めて充実した内容となっています。

展示は、「観音信仰と石山寺の至宝」、「紫式部と源氏物語」の二部構成です。その見どころをダイジェストして紹介します。

第一部は、《石山寺縁起絵巻》をはじめにおき、本尊御前立ち、本尊胎内仏の金銅製の白鳳仏・天平仏、平安時代の増長天、快慶作の大日如来などの仏像や、真言密教の学問の寺としての性格を示す聖教類、礼拝に用いられた涅槃図や曼荼羅図などを展示します。仏像や仏画を芸術的・歴史的な見地から、また仏伝や経典は国語資料としてみるなど、それぞれの鑑賞のしかたはもちろん自由です。しかし、これらすべてのものは、長年これまで多くの人々にとって、とても大切なものとして守られてきたもの

ばかり。普段は厚い信仰の対象となっている仏さまたちです。どうぞ人々の想いと歴史がもたらしたその重みも是非感じ取っていただきたいと思います。

《石山寺縁起絵巻》は、鎌倉時代に制作された『石山寺縁起』に当代一流の絵師が描いた絵巻です。「それ石山寺は、聖武天皇の勅願、良弁僧正の草創なり、本尊は二臂の如意輪、六寸の金銅の像、聖徳太子二生のご本尊なりと云々。丈六の金銅の像を造りてその御身に彼の小像を籠め奉る。左右に脇士あり。左は金剛蔵王、右は執金剛神なり。」という詞書から始まる全部で七巻の体裁をとるこの縁起絵巻は、石山寺の創建の由来、皇室・公家などの尊崇、寺僧

の事跡、本尊の利生などを編年的にしるしたもの。東大寺初代別当良弁が聖武天皇の勅願を受け、如意輪観音を本尊とし開基したことから、宇多上皇・三条院の参詣、藤原道綱の母や紫式部の参籠のほか、貧女が観音信仰により難を逃れた話、末尾は後醍醐天皇の即位、後宇多法皇の再度の院政のことにまで及んでいます。鎌倉時代の美術を示すとき、その時代を特徴づける好資料として絵巻物はかかせませんが、制作当時は有力寺院の多くは国家的官寺としての古代寺院から、民衆に根をおろした中世寺院をめざそうとしていた時期です。石山寺も観音菩薩に対する信仰を喚起しようとする意図があるだけに、その内容も神秘的な奇蹟や靈験が物語られています。絵巻は風景描写もみどころの一つですが、画中にはゴージャスな王朝の世界が写しだされているだけではなく、民衆がもつあふれんばかりのバイタリティーが活写されています。私たちが知っている歴史上の人物もしばしば登場することから、非常に馴染み深い点も魅力のひとつといえるようです。絵巻はこの他にも空海の行跡を伝え描いた伝記絵巻《高野大師行状図》《弘法大師絵伝》の展示があります。この種の高僧伝絵巻は、室町時代高野聖により全国に広まった弘法大師信仰の布教活動をうかがわせ、中央の絵師によるものではない素朴な趣があります。

平成十四年、石山寺では本来なら三十三年に一度開帳される本堂本尊の如意輪観音が皇孫殿下御誕生を祝して特別に開扉され、その開扉に際し行なわれた調査で、本尊の背中上部に設けられていた蓋板の内部に寛元三年(1245)5月21日という墨書がある厨子が出現、内部より四軀の金銅



重要文化財 《石山寺縁起絵巻 第三巻》鎌倉時代 (部分)

造の仏像および水晶製舍利容器が発見されました。墨書にはこの四軀の像は、承暦二年（1078）～永長元年（1096）年に作られた現本尊の前の本尊の胎内に奉籠されていたものだということが書かれています。したがってこれらが創建当時の本尊ではないかと推測されています。今回の展覧会にはこのうちの二軀の小金銅仏が出品されます。さらに、現本尊の厨子の前に安置されている御前立ちの淀君寄進の如意輪観音が、はじめて寺外で公開されることや、多宝塔の現本尊像である快慶作の大日如来坐像の出展は、仏像ファンにとっては願ってもないことでしょう。

左：
重要文化財
《観音菩薩立像》
（本尊胎内仏）白鳳時代

右：
重要文化財
《観音菩薩立像》
（本尊胎内仏）天平時代



重要文化財 《大日如来坐像》快慶作 鎌倉時代

石山寺には、奈良時代から戦国時代に至る仏典としてきわめて高い価値をもつ一切経が蔵されています。その数は4644帖と膨大です。それは正倉院聖語蔵經典に比肩するほどの価値をもつといわれ、宗教学、歴史学のみならず、国語学資料としても貴重で注目されているものです。これらの聖教類の紙背にはしばしば、『漢書』『周防国玖珂郡玖珂郷戸籍』などの残巻文書が書かれています。地方諸国の財政事情や国司等の名前、また年紀の明らかな戸籍としては最古の部類に入るので、古代の律令制度を研究する上では欠かせない重要な文書です。

聖教類は1926点を数える校倉聖教のなかから、光明皇后の経巻を定本とし書写した『如意輪陀羅尼經』をはじめ、真言密教の教学の寺をよく物語る密教の尊像構成を記した図巻や『薫聖教』が御覧いただけます。特に代々の座主以外は容易にみることは許されていなかったとされる『薫聖教』は、菅原道真の孫で三代座主の淳祐（890～953）の自筆の聖教で、真言宗内の屈指の聖教とされています。延喜21年（921）、淳祐は師の観賢（東寺長官・高野山座主）に随伴して、高野山奥院の弘法大師廟に大師号宣旨と勅賜御衣という儀式に



国宝 《淳祐内供筆聖教（薫聖教）》平安時代（部分）

参加した際に大師の衣の香気が淳祐の手にうつり、それ以降彼が書写した聖教には、その香りがするとされ、そこから、『薫聖教』と呼ぶようになったといわれています。

京から逢坂の関を越え、眼前に広がる湖水のながめ、やがて瀬田の清流を下るころには、身は清められ心は静まる。そして、いよいよ石山へ —

王朝貴族が物詣を名目に清遊するに相応しい格好の場所となった石山寺は、観音信仰の聖地としてあったのみならず、芸文をはぐむ舞台となり、山紫水明の地として伝統的に絵画の題材に選ばれて描かれ、詩歌の主題となって詠まれてきました。

第二部は「紫式部と源氏物語」と題して、江戸時代の源氏絵を中心に展示します。屏風や絵巻、画帖、蒔絵硯箱などその多くは大家の姫君の婚礼調度品であったと考えられる作品です。

紫式部の石山参籠説にちなんだ同寺が所蔵する紫式部像は数多くありますが、室町時代に描かれた《紫式部聖像》は、室町時代に描かれた最も古い紫式部像といわれています。他にも宮中絵所預職の土佐派・住吉派、御用絵師の狩野派、近代画家も含め、画帖、屏風、画卷などに仕立てられた源氏物語を主題とした絵画や工芸品などがあります。特にこの源氏絵の中でも、今、内外の研究者より注目されている江戸初期、十七世紀半ばに制作されたと見られる「幻の源氏物語絵巻」と呼ばれる中の一つ《源氏物語絵巻 末摘花》は必見です。この絵巻が仮にすべて制作されていたのならば数百巻におよぶ絵巻であったとされていますが、その全貌は謎です。「幻の源氏物語絵巻」のその分割されたものの中には欧米のコレクションに入っているものもあります。石山寺が所蔵する《源氏物語絵巻 末摘花》は詞書七段、絵六段から成ります。詞書の作者は分かっていますが、その制作依頼者や絵師については不明です。

※展示期間中は作品保護のため、展示替、画面替があります。ご注意ください。



重要文化財 《源氏物語絵巻 末摘花》江戸時代（部分）



会期 平成20年11月29日(土)～平成21年2月1日(日)

新収蔵品展

歴史への誘い — 武士・信仰・民衆 —

未公開資料が語る郷土岡崎

学芸員

浦野

加穂子

岡崎市では、郷土ゆかりの貴重な文化財や美術品などを、後世に伝え、活用するために、資料の寄託や寄附の受け入れを進めるとともに、資料の購入を行っています。多くの皆様のご協力により、収蔵資料は質・量ともに年々充実してきていますが、当館には現在まだ常設展示がないため、残念ながら岡崎の歴史や文化を常時皆様に御覧頂くことができません。このため、各展覧会の中で、新たに収蔵された資料を紹介するよう努めていますが、公開しきれていないものが数多くあります。本展では、近年新たに収蔵された資料の中から、歴史資料を中心に一堂に展示します。資料の収集・保管、それに基づく研究は、博物館の活動の基本を成すものであり、今回の展覧会ではその一端を広く皆様にご理解頂きたいと思えます。

今回の新収蔵品展で展示する歴史資料は、年代も分野も実に様々であり、歴史を広い視点から捉えることができます。ここでは多彩な展示資料の中から、主なものをご紹介します。

まず、甲冑・武具などの武家資料のなかから「刀銘 三州薬王寺助次」（当館蔵）をご紹介します。薬王寺派刀工は、中世矢作宿が栄えていた時代に、矢作地区、現在の西本郷町または宇頭町の周辺で15世紀から16世紀にかけて活躍した刀鍛冶集団です。薬王寺の名を刀銘に切ることから薬王寺派と呼ばれています。同派は、応永の頃（1394～1428）美濃国の兼春が当地に移住して開いたとされていますが、詳細は明らかではありません。本刀の作者である助次は、兼春の流れを汲み、『古刀銘尽大全』では正長の頃（15世紀前期）の刀工としていますが、現存する助次銘の4口の作品はいずれも16世紀のものであり、検討の余地があります。薬王寺派刀工の作品としては、助次や主真助銘の刀などがありますが、現存作品は極めて少なく、薬王寺派の特色を明らかにするには至っていません。本刀は、薬王寺派の全容の解明に新たな指針を与えるものとして、さらには岡崎の中世史の一端を明らかにする資料としても注目されます。

次に天台宗の高隆寺（高隆寺町）、甲山寺（六供町）、真言宗の桜井寺（桜井寺町）、浄土宗西山深草派旧本山の円福寺（岩津町）の仏画、経典、古文書などの寺院資料をご紹介します。延暦25年（806）に最澄が開いた天台宗は、平安時代に三河に広まりました。真福寺・滝山寺をは



刀 銘 三州薬王寺助次 当館蔵

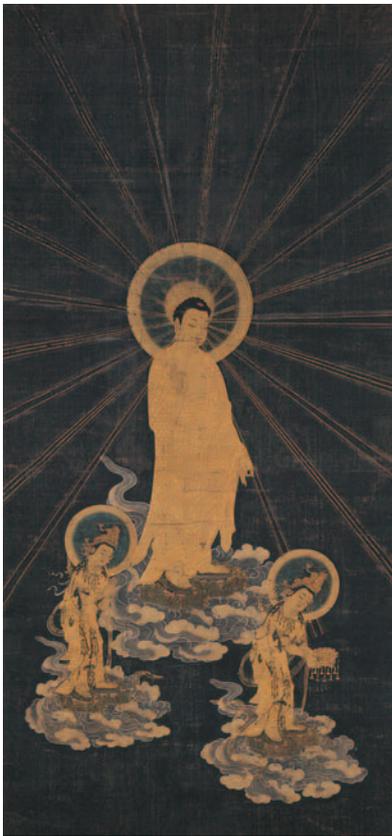
じめとする天台宗寺院は三河の仏教史において重要な役割を果たすとともに、地域の有力者と強く結びつき、寺勢の盛衰は三河の歴史を色濃く反映しています。高隆寺は、古代寺院が天台宗として平安後期に再興されたとみられ、三河守護足利氏の庇護を受けて多数の坊舎がありましたが、弘治年間（1555～58）松平氏と奥平氏の日近合戦で、奥平氏の攻撃を受けて悉く焼失しました。しかし同

3年には合戦に協力した功績により松平元信（後の家康）により寺領が安堵されました。その後豊臣大名の田中吉政により寺領が没収されますが、慶長8年（1603）家康より再び35石を拝領しました。同寺には天台宗の阿弥陀信仰を示す「阿弥陀三尊来迎図」（市指定文化財）などが伝わっており、本図には飛雲上の踏割蓮華座に乗る阿弥陀如来が、観音・勢至菩薩とともに浄土より来迎する様子が描かれています。三尊の衣には、多彩で精緻な切金文様が一面に施され、蓮華座の花弁の外側には緑青、内側には朱、飛雲には金泥・銀泥が用いられており、とても華やかな印象を与えます。信仰の対象である仏像や仏画などに施された華麗な装飾は、聖性を高め、人々の心を極楽浄土へと誘いました。また甲山寺は松平氏との縁が深く、享禄3年（1530）松平清康が安城にあった薬師堂等を岡崎城の鬼門の守護として現在地に移転させ、天文13年（1544）には松平広忠が碧海郡和田郷法性寺などをこの地に移転、1山12坊の大寺院となりました。慶長8年（1603）家康が本堂を再興、同年朱印地250石拝領し、元禄15年（1702）には將軍綱吉が護摩堂を再建し



【市指定文化財】
十二天像のうち帝釈天 甲山寺寄託

ました。その際諸大名が寄進した前立不動二童子、そして十二天の彫像と画像（共に市指定文化財）などが歴史を物語っています。同寺の両界曼荼羅（市指定文化財）は、天台密教特有の八十一尊曼荼羅で、県内でも稀有



〔市指定文化財〕 阿弥陀三尊来迎図 高隆寺寄託



〈第一段〉



〈第二段〉



〔重要美術品〕 天保施米図(部分) 冷泉為恭筆 当館蔵

〈第三段〉

な資料であり、この他にも涅槃図、三千
仏図、天台宗中興の祖、慈恵大師良源
の画像など天台宗の教義と美術を概観
することができる市内屈指の寺院資料
が伝えられています。

最後にご紹介するのは、小野家(糸惣)
や岐阜屋など岡崎の人々の営みを示す
商家資料、国分伯機の書齋で、城下町
岡崎の文芸サロン「市隠亭」に集った
人々の漢詩類や岡崎に宗偏流を広めた
富商太田便山ゆかりの茶道具などの文
芸資料、冷泉為恭筆「天保施米図」(当

館蔵)等の絵画資料など岡崎城下の人々の生活や多彩な
文化を物語る資料です。なかでも「天保施米図」(重要美
術品)は、大樹寺の障壁画(重要文化財)の作者で、復古
大和絵派を代表する画家、冷泉為恭(岡田為恭/1823~
64)が描いたものです。復古大和絵派は、江戸時代後期から幕末に活躍した田中訥言・浮田一蕙などの画家たちを指し、
隆盛した国学・復古思想が画壇にも及び、古画の復興と活
力ある大和絵の創造を試みたことに特色があります。為恭は
古典文学や有職故実(ゆうしやくごじ)に造詣が深く、上代の絵画を熱心に
学ぶとともに、当時の学問や思想、政治動向などにも強い
関心を持ち、大和絵師が得意とした宮中行事や物語などの
主題だけではなく、現実社会にも眼を向け、芸術性や趣味
性の上に終始していた大和絵師とは一線を画しました。本図
は、まさに当時の世情を捉えた為恭ならではの作品といえる
ものです。主題である天保の飢饉(1833~36)は、享保・
天明とならば江戸時代の三大飢饉の1つであり、被害は為
恭の住む京の都にも及びました。本図はこの飢饉の際、慈

善の人々が知恩院内の入院で米を施している様子を、30
歳前後の為恭が15歳頃の記憶や取材に基づいて描いたも
のとみられます。図は三段で構成されており、初段には入院
の門前で赤子をおぶった女性や杖をついた老人、施され
た米を持ち帰る親子などの姿、中段は門前で火を焚いて暖を
とる群集や境内に延びる施米を待つ人々の大行列と堂正面
で記帳をして米を受け取る場面、後段には寺の内部で米の
分配を差配する様子やうず高く積まれた米俵が描かれています。
各段の光景や人物は、多彩かつ精緻な技法を駆使しながら、
要所を捉え、工夫を凝らした構図であり、作者の高い技量を
窺い知ることができます。さらに当時の風俗などを知るうえで
も大変貴重な作品といえます。

本展を通じて、これらの資料が語りかける、岡崎の悠久の
歴史と多彩な文化、そして城下に生きた人々の営みなどに
思いを馳せて頂き、郷土への理解と興味をより一層深めて
頂ければ幸いです。

INFORMATION

■展覧会スケジュール

2008年10月11日(土)～11月16日(日)

石山寺の美 — 観音・紫式部・源氏物語

本年は『源氏物語』が読まれ始めてから一千年を迎える記念の年です。このたび当館では観音のみでととして古くから信仰をあつめ、源氏物語ゆかりのお寺としても有名な滋賀県の石山寺から、普段は目にすることができない寺宝を一堂に集めて公開する機会にめぐまれました。展示は観音信仰と源氏物語をテーマに構成され、国宝、重要文化財、特に仏像や仏画、聖教類や縁起絵巻などが一堂に出品されます。是非この機会に石山寺の歴史と『源氏物語』の世界をたっぷりお楽しみください。

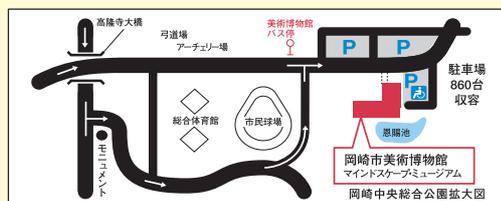
2008年11月29日(土)～2009年2月1日(日)

歴史への誘い — 武士・信仰・民衆 —

近年新たに収集された博物資料のなかから未公開のものを中心にご紹介します。甲山寺や高隆寺の仏画をはじめとする寺院資料や江戸時代の商家に伝わった文芸書や茶道具、冷泉為恭筆の絵画などで郷土岡崎を語ります。

- 開館時間／午前10時～午後5時
 〈入館は閉館時間の30分前まで〉
- 休館日／毎週月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)
 年末年始(12月28日～1月3日)
 ※展示替えのため臨時休館することがあります。

- ◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、
 (名鉄バス) 「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分
- ◎タクシー／名鉄東岡崎駅から約15分
 JR岡崎駅東口から約20分
- ◎自家用車／東名高速道路・岡崎ICから約10分



OKAZAKI CITY MUSEUM



【岡崎市美博ニュース／アルカディア】

●Arcadia 第38号 ●2008年11月発行 ●編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

岡崎市美術博物館 〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1-1 岡崎中央総合公園内
 TEL0564-28-5000(代表)

ホームページ <http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>



古紙パルプ配合再生紙使用